

第十七回南のシナリオ大賞 応募作品

魔法使いのシュークリーム

登場人物

白石渚（10）

松江友輔（21）

中原澄花（21）

岩永茉莉（10）

「魔法使いのシュークリーム」あらすじ

毎週水曜日、白石渚（10）は、仕事が遅い母の帰りをあるケーキ屋で待っている。洋館風の一軒家を改装した店はまるでおとぎ話の世界。店主は魔法で卵と小麦粉を甘くて美味しいケーキにする魔女で、その息子のぶっさらぼうなお兄さんは修行中の魔法使いだと、渚は空想を楽しむ。お兄さんは、なぜか小麦粉も卵も使わないシュークリームを研究していて、渚は試食係。長崎に引っ越してから家以外で人とうまく話せなくなった渚は、無口なお兄さんと過ごす時間が楽しかった。ところがある日、見知らぬ女が店にやってきた。お兄さんと親し気なその人は、アレルギーでケーキが食べられない。お兄さんはその人の笑顔が見たくて、卵と小麦粉を使わないシュークリームを作ったのだ。嫉妬した渚を見て、その人は渚がケーキをまずいと思ったと勘違いしてしまう。渚が頑張って「美味しかった」と声に出すと、お兄さんが嬉しそうに笑った。

ランドセルを背負って走って来る

扉を二回ノックする

渚M「はじめに二回」

扉を三回ノックする

渚M「それから三回……」

扉が開き、ドアベルが鳴る

渚M「(息を吸って)ああ甘くていい匂い」

友輔「いらっしやい、渚ちゃん」

渚M「ふふ、お兄さんのエプロンに白い粉が
いっぱいついてる。また練習中かな？」

友輔「ミルクティーやったな」

振り子時計が秒を刻む音

渚 M 「壁に小鳥が動く振り子時計、天井には
お花のランプ、窓はカラフルなガラスが
不思議な模様になっていて、窓際に長い
テーブルと形が違う椅子が3つ」

椅子をひく

渚 M 「猫の耳がついた椅子が私のお気に入り。
おとぎ話のお家みたいなここは、ふふふ、
魔法使いのケーキ屋さん」

厨房からボールで材料を混ぜる音

渚 M 「こっそり店の奥を覗いてみた。あ、今
日は魔女のおばさんがいない」

振り子時計のカッコウが鳴く

友輔「ああ、おやつ食うか」

渚M「ぶっきらぼうなお兄さんは、魔女の息子で修行中の魔法使い。なんてね、ふふ、こんな空想はお兄さんにはヒミツ」

ケーキ皿をテーブルに置く

友輔「これは、母さんのココアとアーモンドのシフォンケーキ」

渚M「長崎の学校で初めて話しかけてくれた茉莉ちゃんが、『ケーキを作る人はパティシエと言うとよ』と教えてくれた」

ケーキ皿をテーブルに置く

友輔「こっちは俺が作った。感想聞かせてや」

ケーキを食べるスプーンや食器の音

渚M「お兄さんのケーキは薄い茶色で、うーん、まずくないけど、魔女が作ったココアのケーキの方がずっと美味しい……」

友輔「ああ、やっぱ微妙か」

渚M「ああ、いつもそう。声に出さなくても、お兄さんには私の気持ちがわかつちゃう。本当に魔法使いなんじゃないの？」

ボールでケーキの材料を混ぜる音

渚M「それからまた、お兄さんはケーキの練習。私は絵を描いたり本を読んだり。来週はどんなケーキかな」

学校のチャイムの音

放課後の生徒たちの声

茉莉「わあ、渚ちゃん絵うまかね。……それ、あの店のケーキ？　あの坂の途中の。……ええなあ、あのお店のケーキは美味しそうやけど、茉莉は食べられんとよ」

ランドセルを開けて手紙を取り出す音

茉莉「お手紙くれるん？　後で読むな。……なあ渚ちゃん、家では普通に話すとやろ？　茉莉とも口で話さんか」

渚M「あ、何か言わなきゃ、言わなきゃ……」

茉莉「あ、ルミちゃん、一緒帰ろ。渚ちゃん、じゃあね」

渚M「ああ、また何も言えなかった。長崎に来てから、家の外ではずっとそう」

ランドセルを背負って走る

渚M「水曜日はお母さんが仕事で遅いから、
魔法の店で待つことになってる。ふふ、
お母さんの友達が魔女でよかった」

扉を二回ノックする

渚M「はじめに二回」

扉を三回ノックする

渚M「それから三回。水曜はお店がお休み。
だから、これが秘密の合図ねって、お兄
さんが教えてくれた」

扉が開き、ドアベルが鳴る

友輔「いらっしやい、渚ちゃん」

渚M「ふふふ、扉が開く魔法みたい」

友輔「あれ、傘持ったらんかった？」

渚M「雨？ 走ってきちやっただもん」

友輔「濡れたままだと風邪ひくけん」

タオルで頭を拭く

渚M「お兄さんがタオルで髪を拭いてくれた。

お兄さんには、何も言わなくてもいい」

鼓動の音

渚M「心臓の音がする……」

友輔「すごか音やね」

渚M「え！ お兄さんにも聞こえちゃった？」

雨が窓ガラスを打つ音

友輔「雨、すごかね」

渚M「はあ、なんだ雨か」

友輔「さて、今日のおやつは何やと思う？」

渚M「あれ？ 今日のお兄さん変、いつもよ

り何だかお喋り……」

ケーキ皿をテーブルに置く

友輔「みんな笑顔になる魔法のシュークリー

ム、なんてな」

渚M「お兄さんは、卵も小麦粉も使わないシ

ュークリームを作ると言って、もう何度

も失敗してる。うまく膨らまなかったり、

クリームがボソボソだったり、何度も何

度も失敗した。えっと今日のが……」

友輔「これ食べるの、七回目やった？」

包み紙を捲る音

渚M「シュークリームを半分に割ると、ふわふわの生地が包んでいたクリームがトロツと溢れでた。ああっ、慌てて口を近づけてクリームを吸い込んだ」

友輔「クリームは豆乳で作ったんよ。生地は米粉。……どがんね？」

渚M「うわぁ……」

友輔「あー、それ、その顔、見たかった！」

渚M「ふふふ、このままずっと、口の中のクリームが溶けなければいいのに」

扉が開いて、ドアベルが鳴る

風が吹き込む

友輔「おう、いらっしやい！」

澄花「ごめん、ちよつと早かった？」

友輔「よかよか。澄花、こつち座って」

澄花「あ！ 渚ちゃんよね？」

渚M「お花屋さんみたいな匂い……。ふんつ、

さては悪い魔女だな！」

澄花「友輔がね、秘密だから来るなって、な

かなか渚ちゃん紹介してくれんけん。や

つと会えて嬉しかよ！」

渚M「友輔、っってお兄さんの名前だ」

澄花「よかねえ、渚ちゃん。私、友輔のケ」

キ食べたことなかとよ」

渚M「ふうん」

澄花「そいでも友輔のケーキの話はめっちゃ好き。友輔は本当にケーキが好きやろ。作るのも食べるのも。そいけん一緒に食べとる気分になれるとよ」

渚M「食べたことないのに？ 薄茶色のケーキは不思議な味だよ。パッサパサもあるよ。私いっぱい食べたことあるもん」

澄花「私な、卵もだめ、小麦もだめ。食べられないの。アレルギーってわかる？」

渚M「アレルギー？…知ってる、それ。茉莉ちゃんの給食は、みんなと違う容器に入ってる。クリスマスのケーキも茉莉ちゃんだけ違う色をしてた」

友輔「なあ澄花、食うてみんね？」

澄花「え？」

友輔「一緒に食いとーて作ったとよ。澄花が

食べられるんを」

澄花「本当に？ 私、食べられると？」

友輔「すぐ、用意するけん。待っとって、な、

すぐやけん」

振り子時計が秒を刻む音

渚M「口の中のクリーム、なくなっちゃった」

澄花「あ、クリームついとる、渚ちゃん、そ

こ。私、ティッシュ、持っとるよ」

ティッシュを袋から引き出す

澄花「ふふ、拭いてあげる、……よし、取れ

たよ。美味しかった？」

渚M「あーあ、舐めちゃえばよかった」

澄花「あー、その顔、もしかして微妙やったと？ おばさんからもまだOKもらえな
いって言うとつたけんなあ」

渚M「え？ 微妙じゃないよ。そんなこと思
つてない。ねえ、違うよ」

振り子時計の秒を刻む音

澄花「まあ懲りずにまた食べてあげてな」

友輔「何を懲りずに食べるって？」

渚M「違う！ 違うよ。お兄さんあのね」

振り子時計のカッコウが鳴く

渚「美味しかったよ」

友輔「渚ちゃん、今、声……」

渚「お兄さん、あの……」

友輔「うわあ、渚ちゃんの声やあ！」

渚「あ、あ……」

友輔「あ、ごめん。騒いでごめん。よかよか、

ゆっくりでよか」

澄花「友輔ずつと言うとったもんね。渚ちゃ

んに美味しいって言うてほしいって」

友輔「それは顔見たらわかつとったけど」

渚「とつても美味しかった」

友輔「あはははっ！……もう一個、食う？」

渚「食べたい」

友輔「みんなと一緒に食べようや！」

シュークリームの包み紙を捲る音

澄花「(食べて)うわあ、これ、あと三つは余

裕で食べられる！」

渚「ちよつと」

澄花「渚ちゃんも二個目やろ」

渚「ついてる、クリーム」

澄花「ん？ どこ？（舐める）」

渚「あ、舐めた！」

澄花「へへ、だってずっと我慢しとったとよ。

優秀な試食係のおかげやな」

友輔「あはは！ これからも頼むわ」

渚「うん！」

三人の笑い声（F O）

ランドセルを背負って走る

茉莉「お母ちゃんがな、食べてもええって！

ほんまに茉莉も同じの食べられると？」

渚「うん、だってね」

扉を二回、そして三回ノックする

渚「魔法使いのシュークリームだから」

扉が開き、ドアベルが鳴る

（了）